

れを含めれば本県のへき地校は実に34.3%を占めている。

また、へき地学校は、会津地方に多く、ついで阿武隈山系、奥羽山系に分布しており、その多くは小規模校と分校である。

児童・生徒数について見れば、県全体の児童・生徒数に対し小学校児童は10.0%、中学校生徒は9.0%にあたり、また、教職員数では約16%がへき地校に勤務している現状である。

## 2. へき地教育の振興策

へき地学校の振興策はへき地性の解消と教育条件の充実改善にある。とくにへき地の学校は概して小規模校であり、かつ、分校も多いため複式学級が多い。したがって学校の統廃合を推進し教育の諸条件の改善をはかるとともにへき地学校に優秀な教職員を確保することが緊要である。

### (1) へき地教育充実の人事行政

「昭和45年度末小・中学校教職員人事に関する方針」において「へき地学校の教職員組織の充実をはかるため、都市、平地、へき地相互間の交流を促進する」ことを重点事項にかかげ各地域間の計画的な交流を推進することとした。

また、へき地派遣制度の推進、管理職への昇任にへき地学校勤務経験を資格要件とするなどの施策もあわせて実施した。

#### ① へき地交流

##### ア. 地域区分

県内の地域区分を次のとおりとする。

特A地域 旧4市(福島・郡山・若松・平)の学校

A 地域 市・主要町村の学校

B 地域 特A・A及びC地域以外の学校

C 地域 へき地の学校(人事委員会、へき地教育振興会、教育事務所の各指定学校)

#### イ. 地域交流

(ア) 昭和28年度以降採用者のうちで、へき地学校勤務の経験のない者については、計画的にへき地学校に転出させる。

(イ) 相当期間へき地学校に勤務し、都市又は平地の学校に転出を希望する者については、優先的に考慮する。

(ウ) へき地学校の多い会津ブロックとの交流を積極的に推進する。

昭和45年度末へき地交流件数

学校種別	へき地への転入件数			へき地からの転出件数		
	A→C	B→C	計	C→A	C→B	計
小学校	91	142	233	92	173	265
中学校	82	97	179	87	93	180
計	173	239	412	179	266	445

#### ② へき地派遣制度

都市、または平地の小学校、中学校に勤務する教員のうち、とくにへき地教育に熱意を有する優秀な中堅教員を選考し、計画的にへき地学校に派遣しその教育実践をとおしてへき地教育の振興に役立て、当該教員が相当期間勤務し、その勤務成績が良好の場合は抜てき人事等の優遇措置を講ずることとした相当期間とは3年間である。

へき地派遣教員派遣校名一覧

管内名	地区名	昭和40末		昭和41末		昭和42末		昭和43末		昭和44末		昭和45末	
		派遣校	派遣前の地区	派遣校	派遣前の地区	派遣校	派遣前の地区	派遣校	派遣前の地区	派遣校	派遣前の地区	派遣校	派遣前の地区
県中	岩瀬			羽湯湯 鳥本 小	田信西 村夫河			湯本小 相馬				羽鳥小	いわき
	石川			大久田小	岩瀬 論田小	西白河	大久田小	田村					
	田村			古道小	郡山 都路一中	岩瀬	古道小	岩瀬 都路一中	西白河				
県南	東白川			青生野小 青生野中	岩いわき 瀬き	片貝倉 小	田村山 真那	名倉 小	西白河 山	青生野小	伊達	片貝小	岩瀬
	耶麻	奥川中	北会津	奥川原 小	両沼 沼沼	磐梯 小	両沼 沼津	奥川原 小	伊達山	奥川中	郡山	檜原中	西白河
会津	両沼	喉丸 小	北会津	下中山 小	耶北会津	喉丸 小	北会津	喉丸 小	耶北会津				
	南会津	朝日 小	耶麻 小	館岩 小	北信 小	会津 小	朝日 小	伊達 小	上伊達 小	両沼 小	沼沼 小	明和 小	北会津
相双	相馬	小宮 小	いわき	飯種 小	双葉 小	長泥 小	双葉 小	比曾 小	いわき				
	双葉	葛尾 小	いわき	津島 小	相馬 小	葛尾 小	いわき	津島 小	いわき	葛尾 小	いわき	葛尾 小	伊達
いわき	いわき	田人 小	相馬 小	貝泊 小	双葉 小	貝泊 小	双葉 小	貝泊 小	双葉 小	小白井 小	双葉 小	楠壳 小	双葉
	小学校	6		13		10		12		4			3
中学校	5		4		7		3		2			3	
計	11		17		17		15		6			6	